川越市立博物館

博物館だより

第26号

三芳野天神縁起（三芳野神社蔵）

埼玉県指定文化財。紙幅36.3cm、長さ約17mの絵巻物。川越城内に鎮座する三芳野神社の縁起を史実・伝説とりまぜて絵と文で華麗に描写したものである。

巻末の詞書および社伝によると、慶安2年（1649）正月、城主松平信綱が作成させたもので、林道春（羅山）の撰文、乗海阿闍梨の寄進という。また『三芳野名勝図会』では、書は本阿弥光悦、画は勝田沖之丞（狩野派の絵師で、将軍家光の御部屋絵師）によると伝える。

本紙の詞書部分は、下地に砂子で象った宝雲や切箔をあしらい、表装には大河内松平家の家紋である桜花を散らした裂（きれ）を用いている。金梨地漆塗外箱に納められた贅沢な仕立てである。

全体は、前書きと九つの物語の全十段から構成されており、どの場面も美しく彩色されている。上掲の部分はその内の第2図にあたり、在原業平の登場する『伊勢物語』の場面である。（以下、川越市立博物館「第五回特別展『三芳野神社の社宝』展示図録」による）

在原業平中将東国へ下りける時、三芳野に来り、ある女にあハむと云ける。女の母なん藤原なりけるによりて、中将にゆるさんとて歌をよミてやる。

三芳野のたのむの雁もひたふるにきみか方にそよると鳴なる

中将返歌

吾方によると鳴なるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれむ

業平中将の時より今に至るまて漸八九百年に及ふといへ共、毎年かりかねの時をたかへす往来する事ハ是も神のハからひ成へし。

古代の川越のまつり

川越で、祭りといえば川越祭りが有名です。軽妙な囃子と華やかな山車に代表されるこの祭りは、川越氷川神社の祭礼として、川越の町の多くの人々に支えられた伝統行事です。

ところで今回紹介したいのは、今から1,500年前の古墳時代の頃のムラの「まつり」についてです。川越市には、この時代を代表する遺跡があり、その調査成果から考えていきたいと思います。

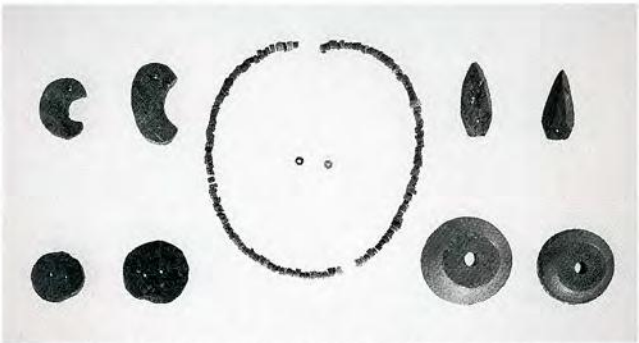


写真１　いろいろな石製模造品（埼玉県立埋蔵文化財センター蔵）

1　古代の「まつり」の跡

川越市西部の霞ケ関地区。その一画の小畔川と入間川に挟まれた伊勢原町周辺は、現在、中・高層住宅が建ち並ぶ新しい住宅地域です。実は、この周辺が昭和59年から60年にかけて発掘調査が行われた御伊勢原遺跡という古墳時代のムラの跡だったのです。この遺跡からは、５世紀中頃から後半にかけての住居跡が68棟見つかっています。またこの遺跡からは、石製模造品（せきせいもぞうひん）といって、当時のムラの中で用いられた「まつり」の道具が住居の中だけではなく、ムラの広場のようなところで多量に見つかっているのです。ところで石製模造品とは、どんなものなのでしょうか。これは、鏡や剣、玉といった古墳時代の権力者が使用した「まつり」の道具の形をまねて作ったものです。材料は滑石という灰色もしくは白色の柔らかい石や緑泥片岩を使用しています。高価な鉄や青銅などで作られた本物の「まつり」の道具は、一部の人間しか持てませんでした。従って一般の人々は形だけ写した石製模造品を、ムラの「まつり」に使用したのです。

2　いろいろな石製模造品

写真１は、当館の常設展示室の原始・古代部門「ムラの生活」に展示中の石製模造品類です。これらの大部分は、御伊勢原遺跡から見つかったものです。中央に円形にならべてある小さな玉は、臼玉（うすだま）といいます。これは、直径が５mm前後の大きさで２mm前後の孔があけられています。その左上が勾玉（まがたま）で、左下に見えるのが有孔円板（ゆうこうえんばん）です。これは、鏡を模造して作られたものとされており、中央に１つか２つの孔があけられています。一方右上の三角形のものは剣を模造したものと考えられており、剣形品と呼ばれています。こちらも端に小さな孔があけられています。右下に見える円盤のようなものは紡錘車（ぼうすいしゃ）です。紡錘車とは、糸に撚り（より）をかける時に使用する道具です。中央の孔に鉄や木などの糸巻き棒を入れて回転させ、その弾みを利用して糸に撚りをかけます。紡錘車の場合には、実際に使用された生活道具なのか、「まつり」のための専用具なのかの判断は難しいところです。これらの石製模造品にあけられた孔に紐を通し、木の枝などに吊して「まつり」の道具に使用したと考えられています。

写真２　御伊勢原遺跡１号祭祀跡全景

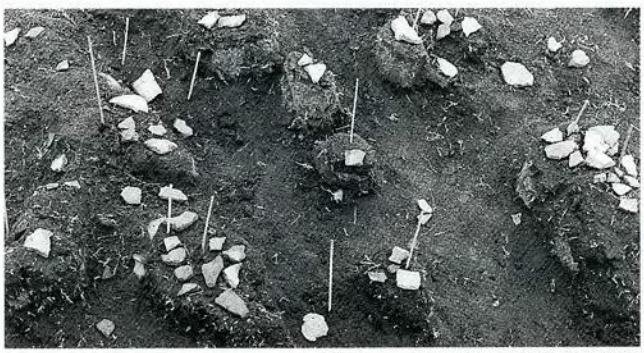


写真３　１号祭祀跡の遺物出土状況

3　石製模造品を使った御伊勢原遺跡の「まつり」

従来石製模造品は、主に古墳時代の住居跡や古墳から見つかっていたものでした。しかし、御伊勢原遺跡では、住居跡の外のムラの一画に多量の土器とともに集中的に見つかっています。このことで、古墳時代のムラの「まつり」を考える上での新しい手がかりが得られたのです。

御伊勢原遺跡には、２カ所のまつりの跡（祭祀跡＝さいしあと）がありました。その一つの１号祭祀跡は、ムラの最高所に位置していました。石製模造品の勾玉７、有孔円板41、剣形品65、臼玉1999などとともに復元不可能な土器片が見つかりました。写真２は、発掘調査当時の全景、写真３は石製模造品や土器の出土状況です。写真では、膨大な土器の量はわからないかと思いますが、大里村の埼玉県

立埋蔵文化財センターに収蔵されている量をみると、整理箱にしておよそ30箱にものぼります。1cmほどの細かい破片から、おおよその形がわかるものまで多種多様で、「まつり」が終了した後で破砕されたものと思われます。もう一つの2号祭祀跡は、2m四方に土器や石製模造品が分布していました（写真4・5）。1号祭祀跡とは違い、土器の復元がある程度可能であると報告されています。

調査報告者は1号祭祀跡について、その膨大な遺物の出土量から、「厳密には祭祀に用いた土器と模造品の捨て場に過ぎない」としています。一方で2号祭祀跡については、「場合によっては、この地点で破砕されたものか、そのまま放置されたものと考え、第1号祭祀跡とは祭祀の種類が異なるものとみなしたい」と述べています。

それでは、古代人の「まつり」とは、一体どのようなものだったのでしょうか。次にその状況を考えていきたいと思います。

写真4　御伊勢原遺跡2号祭祀跡

写真5　2号祭祀跡の遺物出土状況

4 古代の「まつり」のかたち

御伊勢原遺跡の1号祭祀跡は、祭祀後不要となった「まつり」の道具を廃棄したとされていますが、私は集落の最高所に一定の意図をもって土器や石製模造品を破砕して散布した跡、すなわちカミに祈り、捧げものをした後の「まつり」の最後の状態だと考えています。もちろんあれだけの多量の土器や石製模造品は、一つの住居の住人によるものではなかったでしょう。おそらくは御伊勢原の古墳時代のムラ人すべてか、周辺のムラも含めた人々の「まつり」の結果ではないかと考えています。「まつり」に使用した道具を破砕・散布するのもムラの「まつり」の重要な一場面だと思うのです。2号祭祀跡は、1号祭祀跡よりも規模が小さく、ムラの中の一部分の人々が行った「まつり」の跡と考えられます。それでは、破砕・散布される前の土器や石製模造品は、「まつり」の場でどのように使われていたのでしょうか。御伊勢原遺跡から見つかった資料の大部分が収蔵・保管されている埼玉県立埋蔵文化財センターの収蔵庫内の展示では、その復元が展示されています（写真6）。これによると、いろいろな大きさや形の土器が置かれ、食物や酒をカミに捧げものをした様子が表されています。その下には、破砕された土器片や石製模造品が敷きつめられています。そして「まつり」の目的については、豊作祈願などがあげられています。御伊勢原遺跡のようにムラの一画に大規模な「まつり」の跡が見つかる例は、そう多くはありません。つまりすべての古墳時代のムラで、こうした「まつり」を行っているわけではないのです。従ってこの「まつり」は、通常の住居内での「まつり」の対応範囲を超えた、ムラにとって重大な事態を受けて行われたと、私は考えています。その主要な原因は自然環境の急激な変化（自然災害）を意識したものでしょう。当時の人々の生活は、現代と比較にならないほど厳しい自然にさらされていたものでした。彼らの生業も、自然環境の安定によって初めて成果を保障されるものでした。河川の増水とか火山の噴火など、人間の力の到底及ばない事態に対し「まつり」を行ったのではないでしょうか。

写真6　御伊勢原遺跡の「まつり」の復元展示

古代の「まつり」については、まだまだわからないことが数多くあります。このことについては、私なりに今後も考えていきたいと思います。今回の小文を通じ、遠い昔に行われた「川越祭り」に思いをはせていただければ幸いです。（本文に使用した写真は、埼玉県立埋蔵文化財センターより、提供・協力をうけました）

○参考文献

立石盛詞『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第79集

平岩俊哉「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』12　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（教育普及係　平岩　俊哉）

川越にいた 将軍小姓たち

「生類憐み令」で悪評高い第５代将軍徳川綱吉は、学問を偏愛したことでも知られる。このため綱吉の在位時代には、参勤の諸侯は書物を懐中にし、江戸城宿直の番士も学問に励むという風潮が広まった（『徳川実紀』）。

当時の川越藩主は、綱吉の覚え目出度い柳沢吉保で、自ら学問に精励することは当然のこと、荻生徂徠らの学者を召し抱え、将軍の吉保邸お成りの際には、君臣の間で親しく学問講釈が行われた。

こうした吉保の忠勤が認められて、別表にみるような綱吉の小姓らが、吉保の領地川越へ移住を命じられている。移住の時期は異なるが、理由はいずれも学問修業のためとみられる（注１）。

名前	職	備考
林　又右衛門信如	小姓	林羅山の曾孫 元禄9年6月赦免
三宅作左衛門与従	御小納戸	荻生徂徠妻の兄
仁賀保甲斐守誠成	小姓	宝永元年7月没カ
三間　伊大夫好将		
同　善大夫政久	御近習番	好将弟
同　大隅守政房	小姓	好将弟
同　主水矩寛	小姓	好将弟
野呂数馬教景	小姓	

『徳川実紀』『寛政重修諸家譜』による

彼らは川越の地でどのような日々を送ったのであろうか。柳沢家の記録「楽只堂年録」にも記載がないようで、今後の調査研究がまたれるが、柳沢時代城下図で、三芳野神社所蔵「元禄七年川越古絵図」には仁賀保甲斐守の屋敷地が、さらに川越市立図書館所蔵「元禄七年川越図」には三間兄弟の屋敷地も描かれていて興味をひく（注２）。

将軍小姓仁賀保甲斐守の墓碑（市内喜多町広済寺）
（正面）秋窓院殿前甲州大守心月匡円居士
（右側）宝永元甲申年（左側）七月二十日
（碑陰）源氏仁賀保甲斐守誠成公

なお、林又右衛門及び仁賀保甲斐守を除き、彼らは将軍綱吉の没後間もない宝永６年３月６日、吉保の転封地甲府から一斉に江戸へ召され、小普請となった。

（注１）平石直昭『荻生徂徠年譜考』昭和59年平凡社

（注２）既に大野瑞男氏（東洋大学教授）は、図中の家臣の氏名などから、元禄７年ではなく同15年以降の城下の様子を描いたものと指摘されているが、仁賀保甲斐守（元禄13年）、三間大隅守（同15年）の川越移住年からみても、元禄15年以降の城下図と考えられる。

（Ｔ．Ｔ生）

…寄贈資料の御紹介…

当館では、毎年、小学校３年生の地域学習の授業に併せたミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」を開催しています。おかげさまで、親子で楽しめる企画として御好評をいただき、今年度も平成11年１月23日から３月７日までの会期中、多くの方々に御来館いただきました。

このミニ展の会期中、市内郭町にお住まいの戸田知一さんより興味深い資料を御寄贈いただきました。それは、「學」の文字の入った２点の鬼瓦です。

戸田さんのお宅は、市立川越小学校のそばにあり、鬼瓦は貸家にしていた住宅の棟に載せられていました。

鬼瓦をよく観察すると、底が山形に抉れているものと底が平らなものとがあります。前者は、「股木」と呼ばれ、屋根の大棟に載せるもの、後者は、「一文字」といい、降棟や隅棟などに使われたものと考えられます。両者を混用するのは、入母屋造りの建物に多いようです。

両者が同じ棟筋に載っているのが本来の姿とは考えられません。もともと、大きな入母屋造りの建物に使われていた瓦を住宅に転用したものでしょう。

市立川越小学校の前身は、明治６年（1873）に設立された北学校・鍛冶学校です（同校「学校要覧」）。その後同14年両学校が合併し、新たに川越小学校として開校します。その後も幾多の変遷を経て、昭和２年（1927）川越第一尋常小学校、同16年第二国民学校、同22年市立第二小学校、そして昭和35年に現在の川越市立川越小学校となりました。

戸田さんから御寄贈いただいた瓦は、長い歴史をもつこの学校の校舎の屋根を飾っていた可能性が高いと思われます。しかし、どの時代のどんな建物であったか明らかにするためには、製作年代や産地の比定などいくつかの問題を解決しなければなりません。今後、調査を進めて展示資料として活用し、戸田さんの御厚志に応えたいと思います。

川越城本丸御殿の変遷

右の表にみられるように、嘉永元年（1848）に造営されてからの約150年間、その時々に様々な使われ方をしながら、変化を受けて存続してきました。例えば、大正から昭和初期まで、煙草工場として使用されました。このときは、主に板戸をガラス戸とするなど、採光と管理面を重点に改装されています（このガラス戸は現在でも使われています）。また、中学校の運動場として使用されたこともありました。天井に残っているボール跡に当時をしのぶことができます。

造られた当時からすると、随分とかけはなれた目的で使用された時期も確かにあったようです。しかしいずれにせよ、明治維新後の破壊の運命を奇跡的に免れてきたのです。

川越城本丸御殿は、現在に至るまでの長い歴史を積み重ねてきた貴重な文化財です。これからも市民の皆様とともに大切に後世に伝えていきたいと思います。

年代	事項
嘉永元年（1848）	第16代川越藩主松平斉典により、川越城本丸に御殿が造営される。16棟、1025坪。
明治初期	入間郡公会所（郡役所会議所）となる。
大正～昭和初期	専売局淀橋支局川越分工場として利用される。
昭和初期	川越青年学校となる。
昭和8年（1933）ごろ	初雁武徳殿となる。
昭和12年（1937）ごろ	陸軍演習のための宿舎として利用される。
昭和22年（1947）ごろ	川越市立第二中学校（現在の初雁中学校）校舎となる。
昭和26年（1951）ごろ	第二中学校屋内運動場として利用される。
昭和42年（1967）	3月に県指定文化財となる。御殿の修理が行われる。
平成2年（1990）	家老詰所が上福岡市の船問屋から移築復元される。
平成3年（1991）	家老詰所が追加で県指定文化財となる。

分館だより

二番蔵補強工事完了
蔵造り資料館

平成11年2月1日（月）～26日（金）の約1カ月間にわたり、蔵造り資料館二番蔵（煙草蔵）の補強工事が行われ、無事完了しました。

川越に蔵造りの町並みが形成されたのが明治26年の川越大火直後からということは有名ですが、蔵造り資料館となっている旧小山家も明治26年の上棟となっております。今から百年以上も前のことで、たいへん古い建築物です。

そこで、博物館では、平成8年度に「川越市蔵造り資料館に関する損朽調査」を行いました。今回の工事は、この調査に基づき、二番蔵を構造補強によって改修するものでした。

二番蔵を資料館の一部として末永く公開するためには本来解体を伴う修理を行うのが最善の方法と考えられるのですが、現在の諸々の事情を鑑みると、解体修理は非常に困難というのが実情といえます。そこで、既存の軸組はそのままに、構造補強をする方法をとることとしたわけです。

工事の概略は下記のとおりです。

1．既存の柱・桁及び梁の仕口（木材を接合するときの接手・組手の切り刻んだ面）を補強金物で緊結する。
2．直下型地震時における梁・束等の仕口の離脱を防ぐため、小屋材の仕口・継手部分を金物で緊結補強する。
3．一階床板の一部を剥がし、土間コンクリート打設後、礎石を据え付け、床板を復旧する。

なお、この工事中たいへん御迷惑をおかけしましたが、近隣の皆様の御協力により無事工事を終了できましたことを厚くお礼申し上げます。

Information

蔵造り資料館
ホームページアンケート集計結果報告

前号の分館だよりで、アンケート形式による利用状況調査を実施したことをお伝えしましたが、今回はその詳細について報告します。

○アクセス…約６００件　○有効アンケート数…約２００件

○性別を教えてください　○年齢を教えてください

男	女
135	61

10代	20代	30代	40代	50代	60歳以上
4	66	65	23	12	4

○機会があれば実際に蔵造り資料館に来てみたいと思いますか？

ぜひ行きたい	機会があれば行きたい	それほどでもない	行きたいとは思わない
98	77	1	0

○職業を教えてください

会社員	公務員	自営業	自由業	無職	主婦
112	16	5	6	2	16
大学生	専門学校生	高校生	中学生	小学生	その他
10	1	1	1	0	4

○どこからアクセスしていますか？

川越市内	埼玉県内	国内	海外
15	42	115	2

○蔵造り資料館のホームページにアクセスしたことがありますか？

初めて	2回目	3回以上
166	9	1

○今回川越市ホームページ（のリンク）から蔵造り資料館のホームページへアクセスしましたか？

はい	いいえ
76	95

○蔵造り資料館のホームページで印象に残ったものはどれですか？

川越に蔵造りの町並みができるまで	煙草卸商『万文』	『万文』ゆかりの品々
108	11	9
ザ・蔵造りここがチェックポイントだ！	町火消について	利用・交通の御案内
48	11	6

○蔵造り資料館のホームページにどのような内容を希望しますか？

資料館展示資料解説	博物館事業案内	川越の歳時記
19	13	37
蔵造り商家紹介	文化財・史跡案内	その他
32	64	1

○感想を教えてください

A　内容

よい	ふつう	よくない
104	70	1

B　画面レイアウト

見やすい	ふつう	見づらい
104	82	4

○御住所を教えてください

埼玉県	東京都	神奈川県	千葉県	茨城県	宮城県
77	56	25	9	6	3
群馬県	栃木県	愛知県	北海道	秋田県	新潟県
2	2	2	1	1	1
福井県	長野県	京都府	大阪府	岡山県	
1	1	1	1	1	

○その他、御意見・御希望をお寄せください（105件の中から抜粋）

・文化財とか博物館とか好きで、よく訪ねていますが、近いのに川越にはまだ行ってませんでした。ホームページでは簡単に情報収集ができるのでよく利用し、調べています。

・川越の落ち着いた町並みが大好きでよく訪れるのですが、このホームページはそんな川越の雰囲気がよく伝わる、いいページだと思います。資料館、博物館、本丸御殿にも今度是非行ってみたいと思います。

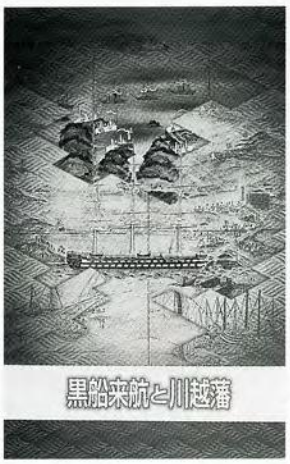
・埼玉県に引っ越してきてから川越は歴史のある町だと知りましたが、何があるのかよくわからなかったのです。このホームページを見て、実際に行ってみたいと思いました。

・川越祭りに一度行ったことがあるが、こんな施設があるのは知らなかった。

・先日川越に行ってみました。蔵のある町並みがとても日本だあという感じです。また、蔵の造りががっしりとしていて、高度な日本建築を感じさせます。この町並みが長く保存されるといいなと思います。このホームページもそんな蔵造りの家にあった落ち着いた雰囲気で好感が持てます。

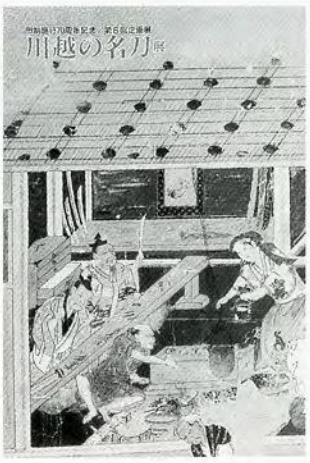
図録紹介

博物館受付でお求めいただけます。



第13回企画展
黒船来航と川越藩
一、一〇〇円

市制施行70周年記念／第5回企画展
川越城　―失われた遺構を探る―
一、〇〇〇円



市制施行70周年記念／第6回企画展
川越の名刀展
二、〇〇〇円

民俗展示室のコーナーから

中福の神楽

民俗展示室「ふるさとのまつりコーナー」では、季節ごとに展示替えを行って、川越市内の行事を紹介しています。今年の春の展示では、「中福の神楽」を紹介します。

中福の神楽は、入間・北足立・多摩地方に分布する「相模流」の里神楽で、川越では中福の根岸家が代々元締となって伝統を守っています。

地元中福稲荷神社の春祈禱で上演される他、近在の神社の祭礼に呼ばれると、一座を組んで舞を奉納します。現在は、藤間諏訪神社・増形白山神社・下赤坂八幡神社・東村山市野口八坂神社の春祈禱や夏祭り・秋祭りに奉納されていますので、近くにお住まいの方は御覧になったこともあるでしょう。川越祭りの際には、川越氷川神社の境内で上演されていますので是非御覧ください。

現在よく舞われる演目としては、「神田種蒔」「墨江三柱大神」「八岐大蛇」「三穂崎漁釣」「猿田大神」などがあります。舞は口伝で、神代物が中心なので、若い人達にはストーリーがわかりにくいところもありますが、その場に応じたアドリブが入ることもあり、思わず観客側から笑い声が起こります。

「中福の神楽」は、市の無形民俗文化財に指定されています。また、根岸家には明治末～昭和の初めにかけて彫られた面が数多く残されており、これらは、市指定有形民俗文化財となっています。

後期子ども博物館教室の感想から……

後期子ども博物館教室が開催され、小・中学生の皆さんが参加しました。その感想の一部を紹介します。（表記は原文のまま）

― わらぞうり作り ―　　H10. 11. 22

・あんでいって、たたみみたいになった時には、とってもうれしかった。昔の人の気持ちがわかった。（小6・男）

・右足をやってたら、つまさきがほそくなったけど、左足はうまくできた。たのしかった。（小5・女）

・わらぞうりは、一足作るのがとても大へんで、片方作ってもう片方作る時点でこしと手に苦痛を感じるぐらい大へんでした。（小6・女）

― お正月準備（おもちつき、他）―　　H10. 12. 19・20

・おもちをあんなうすでつくなんて、やったことがなかったので、おもしろかった。おばあちゃんの家にうすがあるのでやってみたいと思った。（小6・男）

・大豆をうすでひいてきなこにするのにとても力がいったけど、はごたえがあってとってもおいしかったです。（小5・女）

・今では、おもちは機械がやっているけれど、昔はあんなにたいへんな重労働だったなんて知りませんでした。（小5・男）

― 機織り（裂き織り）―　　H11. 1. 31

・糸をつむぐのが、糸が太くなったり細くなったりして難しかった。（小6・男）

・昔話のつるになった気がした!?親切に教えてくれてよくわかったゾ。（小6・女）

・今では忘れられているようないい体験ができたと思う。綿の種をとることや糸つむぎの機械のしくみに昔の人の知恵におどろかされた。わずかの布でも綿からつくっていく過程を知ると大変な手間をかけているのだとわかった。（中2・男）

・終わったときには、じみだったけど自分ではけっこういいできぐあいだった。糸づくりも、すぐきれたりしたけれど楽しくできた。わたからたねをとる時たねの出かたがおもしろかった。（小6・男）

第14回企画展
中世びとの祈り
—仏像・金工品にみる祈りのかたち—
平成11年3月27日（土）～5月9日（日）

たび重なる戦乱の世に生きた中世の人々の生活は、絶えず生命の危機にさらされていました。このような状況のなかで、人々の心を支えたものは神や仏に対する篤い信仰でした。

平安時代末期から室町時代にかけて、いまの古谷・南古谷地区を中心として古尾谷荘と呼ばれる荘園が形成されていました。その中心地・古谷本郷には、平安末期から鎌倉初期に造像された多くの古仏が残されています。このことは、当時の在地領主古尾谷氏の篤い庇護のもと荘園内の各所に仏堂が建てられ、この地で仏教文化がしっかりと根づいていたことを物語っています。また、市内には少なからず中世の仏像彫刻が残され、入間地区内にはかなり多くの懸仏などの金属製の信仰遺品が残されており、この時代の様々な「祈りのかたち」と宗教文化の拡がりを感じ取ることが出来ます。

今回の展示会は、市内に残る仏像や入間地区内に伝わる金工品などの信仰遺品を通じて、信仰に心の安らぎを求めた中世の人々の「祈り」の意味を探ろうとするものです。

※講演会…4月11日　中世の仏像と懸仏　—川越を中心として—　埼玉県立博物館　副館長　林　宏一氏
　　4月18日　中世河越の信仰　目白大学人文学部助教授　有元　修一氏
（お問い合わせは博物館まで）

トピックス

オーストラリアから視察訪問

去る1月22日（木）、折から埼玉県を訪問中のオーストラリア・クィーンズランド州の先生方5名が市立博物館を訪問されました。

一行は、常設展示室のほかに体験学習室も見学、けん玉やベーゴマなどの玩具を手に、日本の子供たちの遊びについて、案内者の説明に熱心に耳を傾けていました。

その後、本丸御殿へも足を運ばれましたが、靴を脱いで板張りの廊下を歩き、日本の冬の厳しさを実感されたようでした。

・・・・・ 利用の御案内 ・・・・・

◆開館時間　午前9時から午後5時まで（ただし入館は4時30分まで）
◆休館日　月曜日（休日は除く）、毎月第4金曜日（休日は除く）、
休日の翌日（土・日曜日は除く）、年末年始（12/28～1/4）、
燻蒸期間（7月上旬頃予定）、資料特別整理期間（12月中旬予定）
◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	3館共通券〈博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館〉
大人	200円(160円)	100円(80円)	100円(80円)	300円
学生・生徒	100円(80円)	50円(40円)	50円(40円)	150円
児童	50円(40円)	30円(20円)	30円(20円)	80円

●（　）内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合。
●開館時間・休館日は、3館とも同様。（燻蒸期間・資料特別整理期間は博物館のみ休館）

交通案内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス　「札の辻」下車徒歩8分

発行日　平成11年3月18日　発行　川越市立博物館
〒350-0053　川越市郭町2丁目30番1号　☎0492-22-5399